

第24回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

雲間に輝く

高津 秀俊（山梨県大月市）

岩殿山



白簾史朗氏講評

日の出直後のみごとな朝の富士山。前山の上に浮かぶ霊峰富士山の姿。まだ、朝焼けの色も残る富士山の美しさ。ひと筋ふた筋、雪肌に残る雲の筋がみごとなアクセントを描く。偏光フィルターの特徴を生かした画面コントラストが最大の効果を挙げている。暁闇に浮かぶ富士山のみごとなコントラスト……。周囲の暗さとマッチした濃淡を描く山肌……。画面の大きさに似合った富士山の大きさと、画面の暗さに似合った色彩……。まさしく第一席に値する出来栄であり、今回、第一等の秀作！といえる。

推薦

午後の光に 奈木 正次（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

題名はもっと時間の経過を示すため「黄昏」とか「夕暮」という形容を使った方が適切であった、と思う。いま、まさに燃え尽きんとする夕雲の紅、静穏な美しさに万物がまさに眠りに入らんとする黄昏どき、一日で最も夕空が美しい時間帯といえる光景を表現している。

推薦

華麗なる朝

大内 京子（千葉県我孫子市）

お伊勢山



白簀史朗氏講評

上空にたなびく二筋の紅雲！それに呼応する富士の積雪！富士山が少々傾いているのが残念！といえるが、富士の美しさはみごとに表現されている。上空の紅雲も美しく、さらに富士の美を増幅している。一瞬の美しさに富士は燃える。

特選

雲立ち昇る

谷崎 耕史（大阪府大東市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

「・・・立ち昇る」という形容は少し異なる感じがする。強いていうならば流動、または湧き昇る、といった方がぴったりする。それにこの題名では春か秋を形容させるので、もっと勢いの強い形の雲に名付けたい。少し静かすぎると思われるところを一考したい。

特選

雲間の秀峰

志村 孝之（神奈川県秦野市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

題名としては雲間の秀峰はちょっとおとなしすぎるので「たなびく雲の上に」という様な題名の方がふさわしいと思う。あるいは「雲流れる中に」というようなほうがぴったりすると思う。そうした際は、山頂を画面中央に置かず、どちらかに比重をかけて空の明きを考えたり、動きを表現したい。

特選

紅に輝く 村上 敏幸（山梨県大月市） お伊勢山



白簾史朗氏講評

題名では“紅”というテーマの意味は、もっと強いものであり、紅ではちょっと印象が弱いと考える。どちらかといえば、「染まり行く雲（あるいは山体）」といった形容にしたい。それにしても作品の印象が少し弱いので「朝焼けのとき」か、「染まり行く・・・」という抽象的な方がぴったりすると考えるがどうだろうか？

入賞

秋色の山頂から 内藤 均（山梨県南アルプス市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

ちょっと題名がそぐわない感がある、というのは「秋色・・・」というのはもっと紅葉が鮮やかで、光も強いときをいうからである。

この写真は葉も大部分落ち、草原も枯草色となって、明らかに晩秋の季節と見える。「晩秋・・・」とか、「落ち葉のとき」といった題名の方がぴったりすると考えられるが、どうであろうか。

入賞

上空紅雲ありて 村上 敏幸（山梨県大月市） 姥子山



白簀史朗氏講評

どう見ても紅雲とは見えない。これはウロコ雲の方がぴったりする。それに富士の山頂にある新雪、上空の雲も巻積雲であり、どうしても晩秋の季節としか見えない。形容詞を正確に利用することが、内容をまた忠実に説明することに通ずることに注意してほしい。

入賞

凜として 谷口 一只（埼玉県加須市） 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

題名にふさわしく、と考えると、少々凜という感じが不足するように思えるがどうだろうか？確かに富士山の上半分にはそうした感じがあるが、画面下部と中部までにはそれが感じられない。画面全体に張り詰めた気魄がみなぎってこそ、この題名が生きることを考えたい。

入賞

山肌光る 山下 政明（神奈川県秦野市） 小金沢山



白簾史朗氏講評

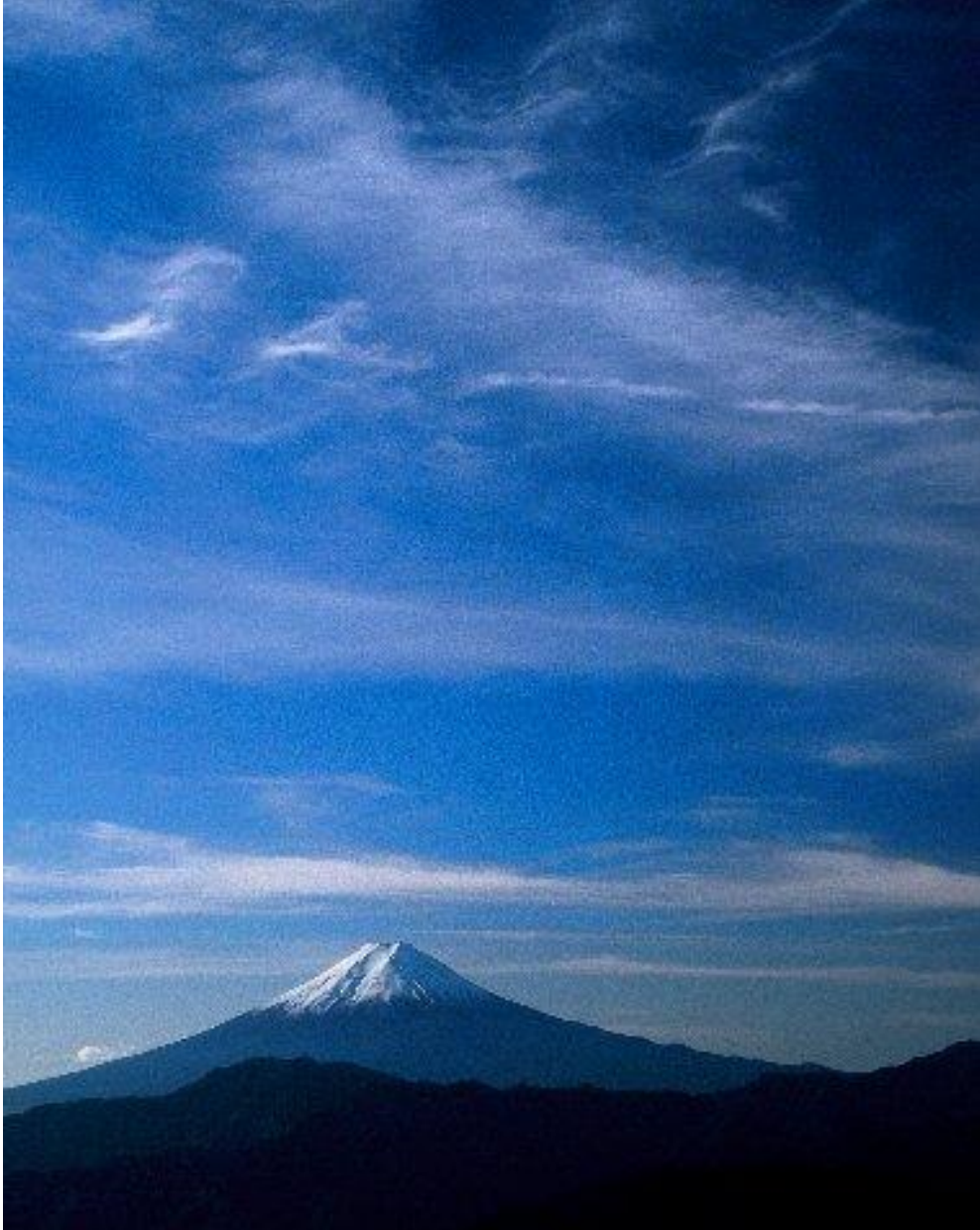
題名としてみると、少々形容が過大すぎたように思えるがどうだろうか？こういう題名だとすると、もっと画面も明るく、富士山も大きく、雪面全体がキラキラ輝いて見える画面だったらと、つい考えてしまう。こうした場合、もっと長焦点レンズを使い、雪面のキラつきをアップで撮影すると感じが出る。それで少々おとなしすぎた、と思われるが？

入賞

青と白の世界

小林 和子（東京都昭島市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

こうした場合、画面と題名を同時に表現するには「雲の白・富士の白」というような抽象的な題名がふさわしい。このままでは実際には青のみが強調されて“青の世界”といった表現となる。あるいは「全天に雲ひろがりて」というふうな表現がふさわしい。または「富士の雪眩ゆく」と小さな部分を強調する技法を使うと意外に生きてくるものといえる。

入賞

雲の競演 愛澤 和弘（埼玉県所沢市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

こうした場合、山より下部の雲は計算に入れず、通常上空の雲のみ計算に入れるのが普通であるが、ここでは上部・下部の雲が同等であるのに、同じウエイトを持たせたが故、画面が2分されてしまった。これではどうしようもないので、通常は下部のみ、あるいは上部のみとモチーフを二分して、それぞれに構図を整えるのが定跡である。

入賞

地吹雪の朝 奈木 正次（山梨県大月市） 滝子山



白簾史朗氏講評

端正な山形で知られる滝子山からの展望！山が遠く、アルバイトが大であるので敬遠され勝ちであるが、そこから展望する山容は美しく、いかにも富士山！といった豪壮さにあふれている。それに加えて優美さも併せ持つ山容は富士愛好者のみならず、万民の敬愛するところである。富士山はその山体に雪が付いた時が最も美しく、この山全体の力を以って私たちを魅了する。その山容に憧れて、私はこれまで数え切れぬほど、この山の展望を愉しんだが、いまだ自分の心に満足は生まれぬ。それだけ、山の美と力は人を魅了するのか、と時に茫然と坐り込み、一日山をあおいで過すこともあるのだ。

入賞

蒼空に立つ 竹下 仁（山梨県笛吹市） 笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

この富士山は、実際にはカラーであるが、私にはモノクロームとしか思えない。事実、単色としか思えない青と白の二色によって構成されたその画像は、あたかも無数の色彩によって彩色されたかのように私の眼には映り、いつとき私は茫然とすることがある。

無色の中の万色絵巻、私にとって富士山は正しくその通りの存在であり、私の眼には色彩を越えて心に感ずる色が反映するのである。

入賞

雲太く光りて 谷口 一只 (埼玉県加須市) 奈良倉山



白簾史朗氏講評

太いナマコ状の雲、細くたおやかなる細雲を交えて富士の上空に広がる無数の雲、その一片一片に私は限り無い美と繊細さを感じる。

富士山！ こんな山がどうして出来上がったのだろうか。幼い時より不思議と
思い続けて尚、私にはその神秘が不可解であり、永久に解けない謎となっ
ている。そして、この山がどうして、私の生まれた地にあり、私の心を魅了し、
捉えたのか、わたしにはおそらく永久に謎として残るだろう。

入賞

強風の富士 高津 秀俊（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

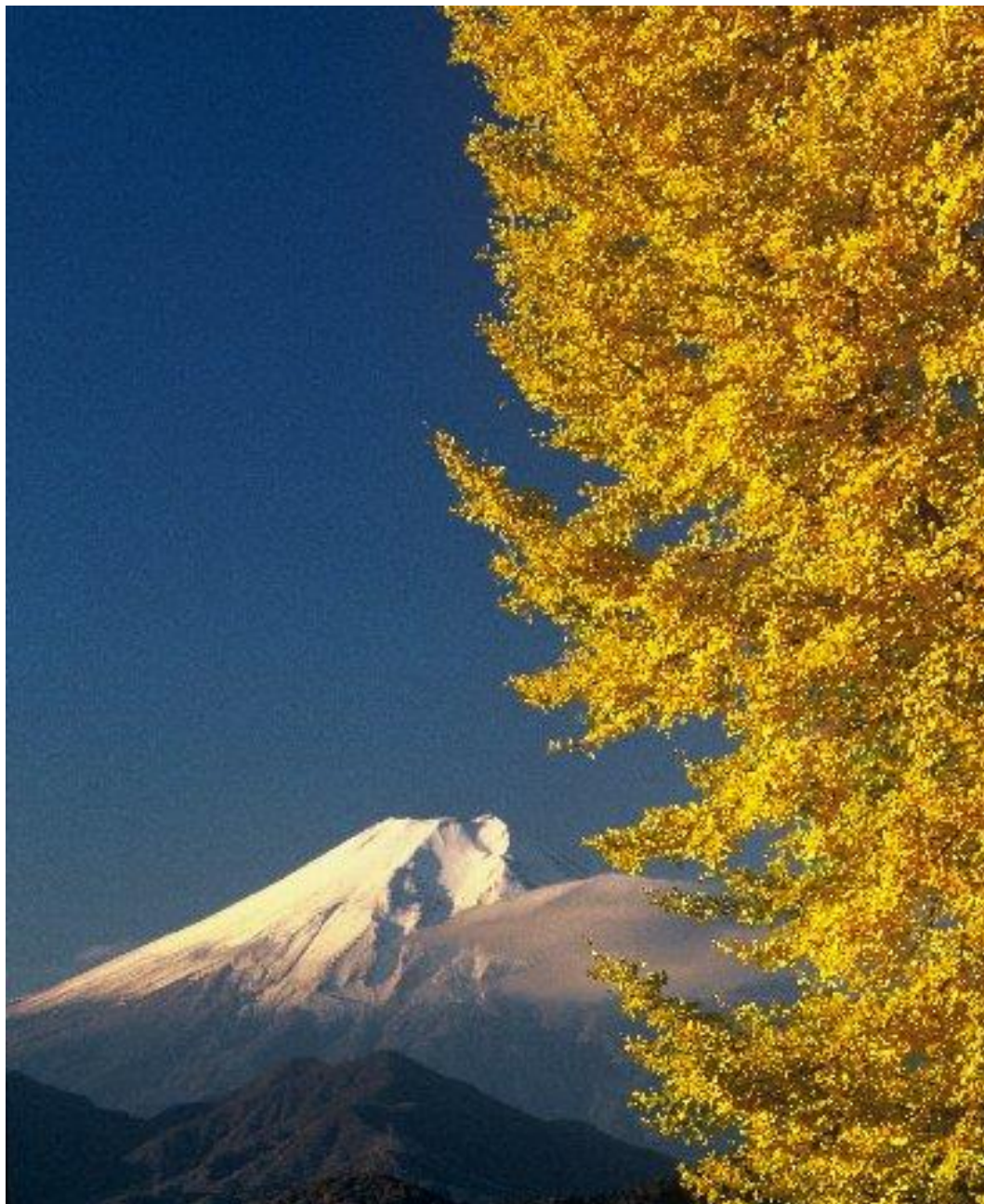
雲のまき上がりは動きがあって良い。しかし、ピントが第一である。ピンボケ、カメラブレは絶対ダメ。富士をよくみると、全体がピンボケである。手ぶれあるいはズームレンズを使ったことによるものか、カメラ保持のまずさか、そういう欠点が出てしまった。きちんとピントが来ていれば、尾根の線や空との境もキリッとするはずである。

入賞

金色に映える

大戸 康世（山梨県大月市）

岩殿山



白簾史朗氏講評

この作品は、若干ではあるがブレがある。富士山もイチョウの葉もよく見ればブレている。条件はいいが、それを生かしていない。構図的には縦真二つになってしまって良くない。風景を撮るのに不可欠なピントと構図、カメラポジション、アングルに特別細かな気を配らなければならない。

入賞

厳寒に色づく

大戸 康世（山梨県大月市）

お伊勢山



白簾史朗氏講評

この作品は、下方4分の1をカットし、右方を光の当たっている所と暗い所の接点で切り、左方も同様、手前の尾根を切って、上方も少しカットすると、全く違った見違えるような作品となる。よく作品を見、各所を比較すること。

入賞

光射す 村上 敏幸（山梨県大月市） 九鬼山



白簷史朗氏講評

右方5分の1、下方6分の1、上を少しカットすればグッと良くなる。あるいは、右方4分の1、左方を少しカットして縦位置にするとさらに良くなる。下の雲と黒い樹林を生かすことになり、富士山もぐっと高くなる。撮るときに構図を考えることが最も重要である。

入賞

新緑に白く 奈木 正次（山梨県大月市） 御前山



白簾史朗氏講評

この作品は、縦位置にすると見違えたものになる。つまり、左を4分の1切ると、杓子山の三角が生きてくる。それと対比して富士山の高さが出る。横位置にするならば、左右と下を少しカットすると、左のわずかな白い雲が生きて良い作品となるだろう。

入賞

初冬の朝 山崎 勝孝（神奈川県藤沢市） 高川山

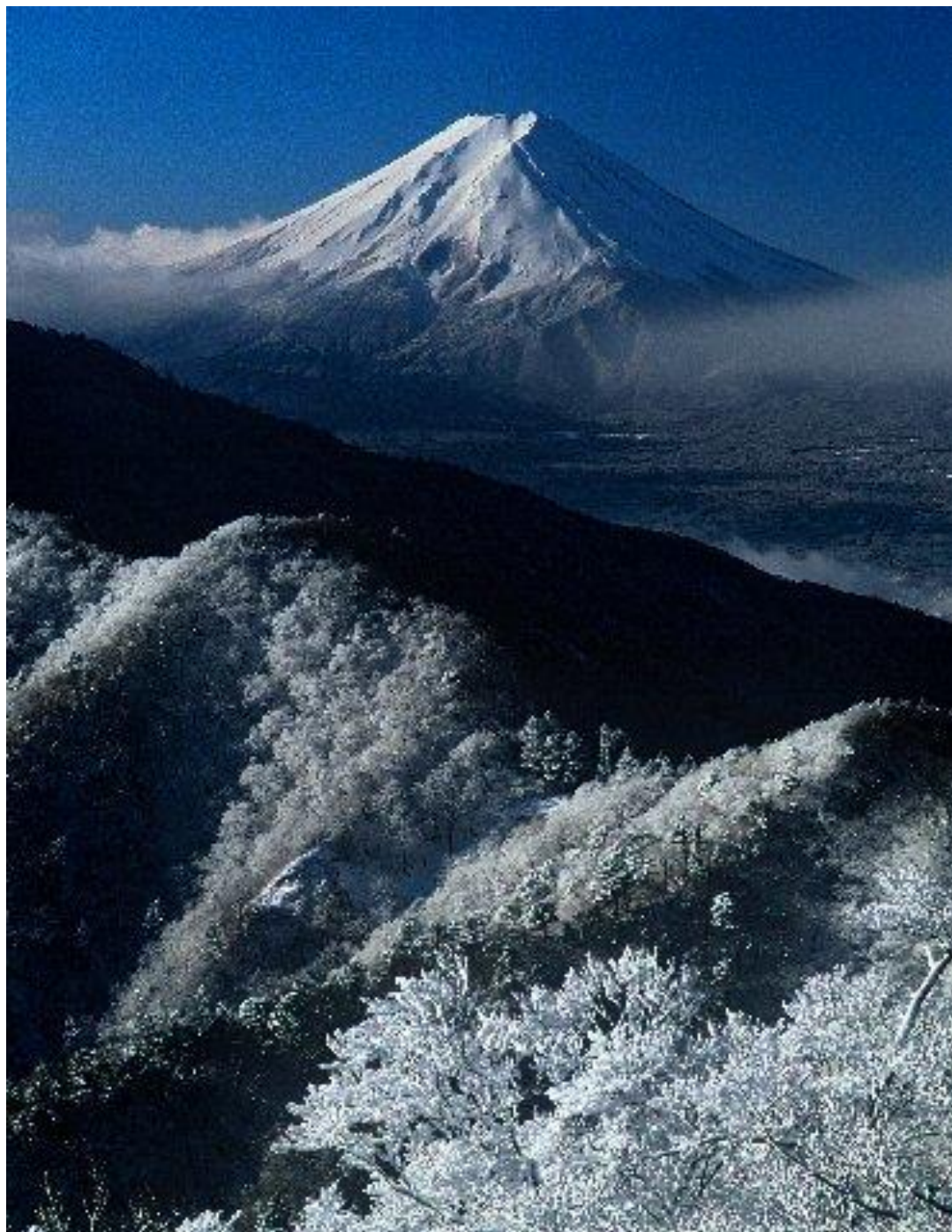


白簀史朗氏講評

この作品は周囲を少しずつカットするとよい。対角線上に富士山頂と2つの雲の塊が並ぶ。それで構図が完成する。もっとよく作品を見つめることが必要。

入賞

白き尾根の上に 山下 政明（神奈川県秦野市） 本社ヶ丸



白簷史朗氏講評

雪の本社ヶ丸からの富士。左端にある雪の少い三角形、左下のボサ、これを切るだけで深い山に見える。これだけで全く違った作品となるだろう。

入賞

霊峰富士 冬空に高し 小谷 哲朗（三重県松阪市） 清八山



白簾史朗氏講評

これは、余分なところが多い。横位置にも縦位置にもできるが、いずれにしても、周囲を切り、山体を大きく入れこむことで作品は生まれ変わることに気付かなければならない。

総評

審査員長 白籟史朗

写真というものは面白いもので、その撮る人によって内容・表現が大きく異なってくる。

いつもいつも同じような撮り方をする人と、そうでなくてその度に全く違うものを撮る人とがある。そのように同じように撮ると言うことは力が揃っているということもあるのだが、違うものを撮ると言うことは、いろんな表現力を持っていると言え、人によってそれぞれ長短・特長があって、それを上手に生かさねばならない。

こうしてみると、やはり上位入賞者は、自分の表現というものを確立している。富士山一山についても、自分がどのように富士山を考え、富士山に対し、どうして表現するかというものを考えている。

普通にただ撮っている、良いものを撮っても代わり映えしないというのは、被写体に対する思い込みがないということになる。ただきれいに撮りたい、良く撮りたいというだけになる。それを自分のものとして、富士山が自分の富士山だというのが撮れるようになるのが、カメラマンとしての使命であり、義務である。

個性を出して撮ると言うことは非常に難しいことであり、プロになろうとしても、何年やってもプロに成れない人は成れない。しかし、つい1、2年で成る人もある。それで一旦消えてしまう人もいるし、そうでない人もいる。表現には、そういう難しさがある。

そういう中でも、入賞者たちは、それぞれ熱心に取り組み、熱心に取り組んでいるからこそ、それぞれに苦労している。今回はこういうものを撮る、ああいうものを撮ると言うことを考えて撮っていることが伺える。

ただ同じようなものをいつまでも追いかけているような人もある。

その時々条件を活かして、自分自身のもので撮る人もある。今回の最優秀賞の作品などは後者であり、その点が強く出ている。